

茂木草介

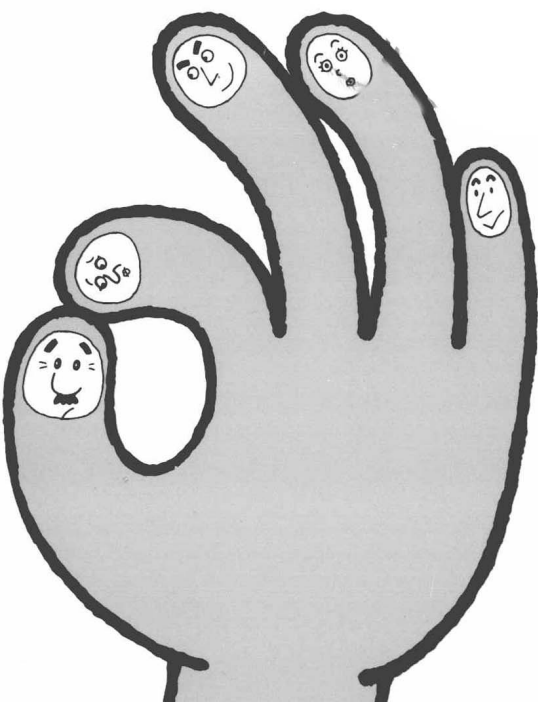
は
にゅう

殖生の宿



は にゅう 殖生の宿

茂木草介



検印廃止

埴生の宿

定価七五〇円

昭和五十三年十一月五日 第一刷

著者 茂木 草介

発行者 藤根井和夫

印刷 榊亨有堂

製本 榊明泉堂

発行所 日本放送出版協会

郵便番号一五〇

東京都渋谷区宇田川町四一―一

(落丁本・乱丁本はお取替いたします)

目次

自殺志願ではないが	5
お節介な密告者	41
ホクロのある愛人	77
何よりもお金が欲しい	113
家は潰れている	150
ホーム・スイート・ホーム	185

カ
バ
ー
・
装
幀
イ
ラ
ス
ト
題
字

大 蟻 土
西 木 方
則 哲 弘
澄 子 克

埴^は
生^{にゆう}
の
宿

自殺志願ではないが

（この歩道橋から目の下を疾走する自動車の列の中へとび降りて死んだ男があった）
と、行田は思った。

国道四十三号線は片側五車線だから、両側で十車線ある。しかし、騒音公害があまり激しいので両端一車線、すつを緑地帯に代えていまは八車線になった。それでも騒音はひどく、歩道橋の上に立つと騒音が震動となって五体に伝わって来る。

数年前に、この歩道橋の上から怒濤のように疾走する自動車の列の上へ投身自殺した若い男がいた。むろん、その男の五体は滅茶苦茶に破壊されて死んでしまったが、そのとき驚いたのは運転手たちである。はじめ、若い男は冷凍車のボンネットの上に落ち、フロントグラスを半ば壊して隣の車線へ落ちた。その半死体を轢いたのは若いアベックが運転するマイカーだっ

た。次に後続の軽トラが轢き、あわてて隣接の車線へ向けてハンドルを切ったので、ある化粧品会社のライトバンと接触して双方ともに相当な損傷を受けた。

最初に人間の五体を受けとめた冷凍車の運転手は、ガラスの破片で受けた顔面の傷をタオルで押さえながら検分の警官に言った。

「殺生だっせ。天から人間が降って来るとは思わんもんな。こんな事故、わての前方不注意にはなりまへんやろな」

マイカーの若いアベックはさすがに青ざめ、軽トラと化粧品会社の運転手は歩み寄って保険金の有無やその評価について声高に話し合いをはじめたが、自殺者の死体については何も言わなかった。死体は無惨な形で放置されたままであった。

いま、その同じ歩道橋から眼の下を疾走する八車線の自動車をゆっくりと眺めている男がいた。歩道橋のらんかんに置いた両手がぶるぶると震えているのは騒音が伝える震動のためであって、彼の内心の緊張からではないのかも知れない。そう言えば、彼の表情は割合にのんびりしているとも受けとれる。しかし、彼が自動車の騒音と震動を楽しんでいないことは確かである。傍観者の眼、世間は世間、私は私という眼である。

彼は中年すぎというか初老というか、とにかくそういう年代の失業者である。以前は中小企業の××織布会社の社長であった。それが石油ショック以来一挙に衰え、半年前に倒産してしまった。そこで彼は社有の土地と建物と社長個人の財産の一切を処分して、七十数人の従業員

に延滞していた給料と退職金を支払った。

「倒産は一切私の責任だす。すまんと思つてます」

会社は個人経営に近いものだったが、法律的には株式会社という法人だった。だから、個人の財産は保全出来たのだが、彼はそれを残さなかった。身一つ、彼に残ったのは三つ年下の妻だけであつた。子供はなかつた。妻は健康な五体を持っていたので、社長夫人の地位がなくなつた数日後から町に働きに出た。

「皿洗いでもなんでもしますよつてに、使こうとくなはれ」

下級レストランの下働きを手はじめに、ビルの掃除婦、幼稚園の宿直人、なんでも少しでも収入の多い仕事へ移つて、今では病院の付添婦をしているらしい。らしいというのは、彼が今では妻の傍を離れていて、妻の仕事がなんであるかを知っていないからである。

「あんた、どうでもここから出て行きやはりますのンか」

「うん。人の顔を見るのがいやになつた」

当時、夫妻は一泊三百五十円の釜ヶ崎の簡易旅館にいた。その宿所を尋ね当てた元の従業員が数名押しかけて来て、退職金が法定の金額から下廻っていたのを理由に、その残額を請求に来るのがうるさかつた。彼らは、個人の財産を吐き出し簡易旅館にいるのを偽装だと言うのである。

「阿呆かいな。かりにも社長の地位にあつた男が、一円の預金も残さず丸はだかになつてしま

うなんて、そんなことが信じられるか。……隠し財産があるやろ。キリキリ出してしまえ」と言う声も顔も怖ろし気であった。

彼は妻を離れて一ヶ月になる。

いまでは死語になってしまったが、昔は浮浪人のことをルンペンと言った。衣類はすべて下着に至るまで洗濯するゆとりがないので、傍へ寄ると臭くて仕方がない。簡易旅館を出るときある程度の金を妻から貰って出たのだが、そのほとんどは食費に費_つつてしまい残額は少ない。もちろんあちこちの職業安定所へも顔を出してはいるのだが、前歴の××織布株式会社社長というのを見ると係員が妙な顔をする。今日に至ったいきさつを説明すると余計妙な顔つきになる。信じてくれないのである。そして、ルンペン同様の風体をつくづくと見守りながら、就職先ではなくて、公共の社会福祉の救護施設のあり場所を教えてくれたりするのである。

しかし、彼はその場所へ行く気はなかった。そこで彼は「世間」のよく見えるこの歩道橋の上へたまたまむことが多かったのである。

「あんたと違いますか」

うしろから妻の声が聞こえた。

ふり返ると、確かに妻であった。妻の名を郁子_{いくこ}と言った。郁子はもともと気の強い女なので泣きはしなかったが、泣き出しそうな笑いを浮かべていた。

「あんた、こんな場所ですなをしたはりますねン」

「なにと言うことはない。ただ、立ってるだけや」

「わてな。いま、病院の付添婦してますねン。お年寄り病人さんのシモの世話もせんなりませんし、あんまり嬉しい仕事やないけども、徹夜の手当ても入れたら一日に七千円にもなりますねンで」

「ふーン。大したもンやな」

「帰っといなはれ。一緒に暮らしまひょ」

「いや。あんたを働かして、わて一人ノウノウと暮らしてる気にはなれん。もう暫く待つてほしい」

「さよか」

郁子は多くを言わなかった。一旦言いだしたら頑強に自分を守る夫の根性めいたものをよく知っている妻だけの愛情めいたものを、郁子は持ち合わせていた。郁子はメモに現在の住所を書いて彼に渡した。

「わてが行く病院は尼ヶ崎と西宮が多うますねン。そやさかい、どっちにも近いこの文化住宅を借りましてン」

なるほど、この歩道橋は尼ヶ崎市と西宮市の中間付近にある。郁子の文化住宅というのも、この近くらいしい。

「気が向いたら帰っといなはれ。文化住宅と言うたら聞こえはええけども、六畳一間きりの汚

いアパートだす。それでも夫婦二人で暮らすのに不自由はおまへん」

「そやな。そのうちに帰るかも知れん」

彼は郁子が帰って行くうしろ姿を見ながら、六畳一間の住所を書いたメモをひらりと歩道橋の外へ棄ててしまった。妻との生活をうとましく思ったからではない。妻の厄介者にならねばならない自分に少々嫌気がさしていたからである。

次の日、ほとんど同じ時刻に、彼はまた同じ歩道橋に立っていた。そして、八車線を疾走する自動車を眺めていた。騒音も震動もあまり気にはならなかった。ただ、彼にとっては、疾走する自動車の価値がいまだによく呑みこめないのである。彼は自動車を怪物のようだと思う。自殺者の道具にさえなかなない速度と重量と強固さを持った、この遠くから来て遠くへ走り去るこのモノは、いったいなんのために生きている怪物なのだろうかと思う。「水の流れと人の身は……」という浪曲の文句があった。人の身の移り変わりを水の流れに託した詠嘆だが、今の世はクルマの流れほどにも急速で苛酷なのだろうか。だとすれば、そこには詠嘆などというロマンはありはしない。

「行田はん。……行田はんと違いますか」

同年輩の男の、なつかしげな声が聞こえた。

彼、行田茂男は驚いてふり返った。

そこには旧知の篠原天作が、人のいいにこやかな笑顔でつつ立っていた。

「行田はん。こんなとこでなにをしたはりますねン」

「ハハハ。クルマを見てましてン」

「クルマを？ ……うちにはカーキチの息子が一人いますけど、あんさんはまさか、クルマが
お好きやおまへんやろな」

行田はニヤリと笑った。篠原は以前行田の会社で働いていたことがある。行田は製品運搬用のトラックを二台買ったが、乗用車の購入は頑強に否定した。当時製造部長を勤めていた篠原が、会社の体面もあるからせて社長用のクルマをと執拗に勧めたが、「必要のあるときはタクシーを使えばいい」と言って肯き入れなかった。それを篠原も憶えている筈である。篠原は話題を代えた。

「ええとこで逢いましたわ。いまから一緒にうちへ来とくなはれ」

「なんで？」

「わては新聞読んで知ってますねン。あんさんの会社が倒産して、その後、社長夫妻は行方不明になった。……そうだしやろ。その記事に間違いおまへんのやろ」

「間違いおまへん」

「ほな、うちへ来とくなはれ。さ、行きまひょ」と、篠原は行田の腕を引いた。

行田はどうしようかと一瞬迷ったが、篠原は昔から行田の好ましい人物である。積もる話を語り合うのも悪くはないという気になった。

篠原の家は西宮市の北郊で、古くから住宅地として開けた閑静な場所にある。

篠原が門柱のプッシュボタンを押すと、すぐにインターホーンの声が戻って来た。妻女のハナ子の声である。

「へえ、どなたはんだす？ 押売りなら勘忍しとくなはれ。うちは行商の人からはなんにも買わんことに決めていますのやさかい」

「違う。わてや。早よ開けとくなはれ。行田さんをお連れしたンやさかい」

「へーッ、行田はんて社長さんの行田はんだすか」

「そや」

「そら、えらいことや」

ホーンの声はふつりと切れたが、なかなか表戸を開けに来る気配はない。老妻のハナ子は元社長への儀礼上、あわてて身づくろいをしたり髪をなでつけたりしているのかも知れない。

「行田はん。この家、見憶えがおますやろ」

「おます。この家はわてのおやじが建てた家だす」

この家は行田の父、つまり××織布会社のいまは亡き先代の社長が隠居所に建てたものが、その後気が変わって篠原に安価に譲り渡した家である。土地は百七十平米（五十坪と少し）、二階建ての和洋折衷方式でサロン式の居間はかなり広いが、カーポートもなく、今の常識からすれば中流の中ぐらゐの小じんまりとした家である。篠原に譲ったのは、まだ定年前だった篠原が

宿痾しゆくゑの心臓病で退職するとき、永年の勤勉に報うつもりで退職金プラスアルファの意味をこめてしたことである。

「その後、土地の値段がうなぎ登りになりましたさかい、いまでは相当な財産になっとりますねン」と、篠原はすまなさそうな顔つきで言う。

ハナ子が戸を開いた。

「こんにちは」と行田が言うと、ハナ子はいねいに受け答えをして行田を招き入れたが、行田の服装のあまりの汚なさに、もはや同情の涙をポツチリと浮かべている。

サロンへ入ると、ソファに寝そべって週刊誌を読んでいた息子の平夫が不可解な眼でそっと立ち上がった。

「社長の行田はんやがな。あんた、子供の時分になんべんもお目にかかってるやろ」

「あア、そう言えば……」と、平夫はペコリと頭を下げたが、表情のない顔でその部屋を出て行った。

「無愛想な子供ですネン。けど、同年輩の友達らには愛想がよすぎるほどええ顔をして見せますのやけどな」

「子供さんというても、もう相当な年だすわな」

「へえ、去年医科大学を卒業しまして、いまは病院勤めをしますネン」

「すると、いずれは立派なお医者はんになる訳ですな」

「いやいや」と、篠原がさえぎった。

「医科大学というても今はピンからキリまでおますやろ。それに、学校を出ただけではどうにもなりまへん。国家試験を通らんことには医者にはなれまへんねん」

「なるほど」

行田は、平夫という息子の上に兄と姉がいたことを憶えていた。それを言い出すと、兄の和朗は薬剤師の免状を持ったユカリという女と結婚して、今はこの近くの下駄履きマンションの一階で薬局兼化粧品店を経営している、と篠原が答えた。

「なるほど。あんさん方も一安心だすな」

行田は姉娘ののぶ子というのをよく憶えていた。のぶ子は美しい子で、少々やんちゃな面を持った小娘であったと思う。

「それで、のぶ子さんはもう結婚しやりましたンやろな」

「へえ、結婚しました。相手は篤実なサラリーマンで、いまはアフリカへ行っておりますねン」
「アフリカへ、商用だすか」

「自動車会社の駐在員だす。それで、のぶ子は神戸のマンションで三歳になる子供と、お手伝いを一人置いて三人で暮らしますのやけど、……これがどうもね」と篠原は口ごもった。
なにやら訳があるらしい。

座を外していたハナ子がサロンへ戻って来て、行田に風呂へ入れとすすめた。